【６】

大事なのはばかりだ。が物ばかりだ。人のものなら、見つかりさへしなければ取れるだけ取つてよろしい、といふ間つた見を道といふのである。これはしてこのお寺の近所の人達に限ることだらうか。これらの人達を眞にける道はと同時にの道をへることだと思ふ。の道とはを止めをなすことだ。のを辧へることだ。

今日の朝ほど一にいつて宗にもにもしいことは稀有といつていゝ。神も佛ものもになく、唯つするのは名利であつて、れるのは法と自然の力ばかりである。神をれ、魂をれるやうでは眞の道やは望まれぬではないか。

はず、話が説じみて來てしまつた。天の名物の一たる音窟の人のことを記してこのをることゝしよう。

天の入の天下大將の東北のの中に、によつてい叺をしたものがある。ものといふは、それは家といふ葉にはされさうもないからだ。これが音なのであるが、音とは、そこに住んでいる當年取つて八十三のの自であつて、の人はもそれを音なんてびた名で呼んでくれはしない。とか、のがつたの小といふのが通である。

このが主であると知つてゐるものもいやうであつた。はひやかしに來た若者をつかまへてはんに法を説いてゐる。いまの時世にの説法をしまひまでいてしてる殊勝な者もゐないので、面白半分いてゐる振りをして中で一のもなく、立ちるのであるが、は後から來たものに、また前の人に説いてゐたきを説くのである。

「お前達は現にえさかつてゐる火の中にあるのだぞ。五につてゐる中に無はお前達を焔のでいてしまふのだぞ。南無と六をふるがいゝ」

など口を酸くして説くのである。

この人六十年前には人であつて、會で立なにんでゐたのだといふ。ふところあつて三十五の時出家し、法まさに四十八年を數へるであるが、圭氏が咸南知事のときに咸の羅寺を持していたもあるといふことだ。今より八年前京城電氣會社の電車（人は必らずかういつてゐる）に後からをかれて、がつちまつたのださうだ。

一時この人、をしたので、はてどうしたことかと近所のものにきいて見たが、一人の行方を知るものはなかつた。そしての音の叺はかに剝がれ、垂木ともいふべき太もなくなつてゐた。それはをす墟の光であつた。

ところが、或日私は子をれてその前を通りかゝつたら、音が新しく葺きかへられてゐるではないか。そして例のが請場でつたのだらう、鉋や木の切などを二りでくゝつて手にぶら下げ、杖に縋つて、ど地を舐めんばかりにを曲げてやつて來るではないか。

「和さん、しばらくどこへゐらつしやつたんですか」

私はほんとにしかつた。

「やあ。に引張られましてな。」

老僧は小さいおを光らしてにこついてゐた。

「養老院？ それはかつたですね。にゐらつしやれば好いのに、何故また、こんなところにつたんですか」

「いやあ、あつちに居ればふにやらんがな――ようしてれた。しかし何のにも立たぬものが人さまの話になつてに居るといふことは、だでないことですわい。張り音でしてゐた方が、にはぢやとうた。それでげ出して來ました」

　はとても足してゐるやうなであつた。（『京城日報』1940年5月23日）